



## バルザック「歩き振りの理論」の諸問題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-07-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中堂, 恒朗 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00011195">https://doi.org/10.24729/00011195</a>

## バルザック「歩き振りの理論」の諸問題

中 堂 恒 朗

「歩き振りの理論」(Théorie de la Démarche)は一八三三年八月中旬から九月初旬にかけ四回にわたって「文芸ヨーロッパ」(l'Europe littéraire)に掲載された。一八三〇年秋に発表された「おしゃれ生活論」(Traité de la Vie élégante)は未完に終わっていて、次号掲載が約束されながらそのままになっていたので、「歩き振りの理論」は、掲載紙は以前の「モード」から移動したけれど、その続編とも考えることができる。要するにこれも、文明人のエレガンスには歩き振りが重要な役割を果たすことを論じた、哲学的科学的ポーズを取ったフィジオロジイものであり、前編と同工異曲だと一応言ってもよからう。

「バルクック事典」(一九六九年刊)の著者フェリクス・ロンゴーは「歩き振りの理論」の項目の中で、この続編も才人(Homme d'esprit)の筆のすさびであって、この理論を深刻に分析するのは間違いだらうというようなことを書いている(二二九頁)。ここには「歩き振りの理論」を非常に重視するピエール・バルベリスなどへの当てつけがあるのかもしれない。野暮な深刻ぶりをいさめる点でロンゴーの忠告は有益だとも思うが、従来しばしばこの方向のバルザック研究者たちは、バルザックの人物や作品を趣味の中に閉じこめてしまう傾向があった。マルセル・ブートロンなどはそういう好事家的研究の第一人者だろう。しかしここで文学批評におけるグー対イデー(時にはイデオロギー)の対立について詳述する暇はない。私としてはロンゴーの忠告を帯しつつもバルベリスなどの解釈に耳を傾けるといふ態度を採った。この作品には確かにヘボ画家のなぐり描きのようなもの(II y avait du

rapin dans Balzac. とロンゴ(は言う)があるが、そしてそれはそれとして大変面白いものであるが、書きなぐりを簡単に読みとばして笑っているだけでは済まないもの、時としてバルザックの「本質」と言ってもよいものがそこに透けて見えることも確実なのである。以下の論述はそういう箇所をテキストからできるだけ多く引用しつつ、大げさで軽白で曖昧な印象を与えるかもしれないけれどもそれらの文章から、バルザックの本質解明の手がかりを得ようとするものである。

「歩き振りの理論」は「おしゃれ生活論」の続編であるにしても、書きぶりは前のものと若干違っている。後者では「部」や「章」にきっちり分たれ、緒論とか総括原理とか物々しい語を弄して哲学論文の様相を呈していたが、前者では仰々しいところはかなり薄れて、書き流しのエッセーに近いものになっている。もっとも、アフォリスムが相変わらず出てくるが、その数は「おしゃれ生活論」では五十三もあったのに、「理論」では十二しかない。つまり「理論」の方が理論的でないわけである。それでそこに、一種のくつろぎと時には不明快さと、そして読み様によっては深さが一層あるということになる。(「おしゃれ生活論」については拙稿『「おしゃれ生活論」の問題点』(女子大文学第25号)を参照されたい)

歩き振りとはまず運動であるが、この人間の運動の法則については、今まで誰も考え及ばなかったとバルザックは得々と書く

「哀れなるかな！ 頸部がでっぷりしておって、脳の回転と脳味噌の重いことで抜きんでておる一群の人々、つまり機械技師や幾何学者たちは、事物に適用される運動について、何千という定理や命題や系を推論し、天空の

運動を明かにし、潮のあらゆる変化の様相を把握しこれを確実な海上安全の諸公式へと導入してきたのである。しかし、何人も、生理学者も患者なき医者も無聊の学者もビセートルの狂人も、また小麦の粒を数えるのに疲勞せる統計学者も、人間とおぼしきいかなるものも、人間に適用される運動の法則に思いを致そうとはしなかつたのである！」（コナール版バルザック全集三十九卷雜録Ⅱ 六一四頁）

この文章にあるのは、科学者に対する皮肉ではなく、科学者と張り合いたいというバルザックの意欲である。しかし一見科学者への皮肉のように取れるのは、十九世紀前半に異常な科学の発達があつて文学が日蔭に取り残されているかのように読まれるからである。しかしバルザックは文学の中に科学を取り込みたいと思つた人であつて、ここに触れてある「運動の法則」なるものも、單なる思い付きではなくて、彼が種々の大きな作品の中で「実験」しようとしたことなのである。当時は「科学的」であることが新しいことなのであつた。フロベールは一八六〇年のヌーヴォー・ロマンを、プルーストは一九一〇年のヌーヴォー・ロマンを書いていたのなら、二〇世紀後半のヌーヴォー・ロマンにとつての札つきの悪者バルザックも一八三〇年代のヌーヴォー・ロマンを書いていたのである（アラン・ロブリエ「ヌーヴォー・ロマンのために」十頁―十一頁参照、一九六九年版、イデ叢書）

「十九世紀前半は」とF・S・テイラーは書いている「科学の新しい出発の時代であり、近代的な物理学、化学、生物学はこの時期からはじまつた。それはまた、動力の使用が世界を變革しはじめた時代でもあつた。ひとくちにいって、この時期に、文明世界は、物質世界を説明する手段として、また、事をしとげるための手段としての、科学の価値を確信したのである。〔中略〕何もかもうまくいくようにみえた。かぎりない進歩の夢は空にうかび、世界はほんとうに、機械化された繁榮と科学的真理とのバラ色の夜明けをめざして進んでいくように思われたのである。」（『近代科学の歩み』菅井準一訳、岩波書店昭和三五年一三〇頁―一三二頁）そしてバルザックもまた人間世界を説明する手段として科学の価値を重視し、現象のドラマを現象の認識と結びつけることによる新しい小

説を創造しようとしたのである。

ところで運動の觀念だが、バルザックはつとに（一八一八年頃）、ドイツ的なダイナミズムを導入したヴィクトール・クーザンの哲学に関心を示していたし、また、社会を一つの有機体運動と見なし産業革命の胎動に呼応して独自の科学的産業的体制を思索したサンシモンの影響をも受けていた。しかし何よりもっと精神の奥の所では、彼の科学に対する異常な好奇心をあげなければならぬ。人はよくバルザックの「科学」といえば、神秘的なものしか問題にしない傾向があるが、これは間違っている。バルザックの「科学」は何も神秘的なものだけを選び分けていたわけではない。しかし有機体の運動（人間の動きと言いかけてもよいが）に特に関心があるとき、そういう方向に向う可能性は否定できない。（バルザックと科学については、マドレーヌ・ファルジョーの大著「バルザックと絶対の探究」に詳しい。アシエット、一九六八年）

とにかく我々はまだフロイト以前の地帯にいたのであって、人間精神の探究に関して、破綻した十八世紀的合理主義的人類学から十九世紀後半の暗い決定論へと向う中間地帯にすることを忘れてはなるまい。フランス革命後の人間の躍動したドラマは、科学の猛烈な発達という知的ドラマと対をなして、バルザックは一方のドラマ（それは生成のドラマと言ってもよいが）を他方の強力な支えによって冷静に客観的に、そしてできるだけ納得のいくように作品化したのである。

「生成」の觀念は、社会問題にしろ個人の運命にしろ、バルザックの小説の中に漸次濃密に導入されてきており（「あら皮」（一八三一年）（ルイ・ランベール）（一八三二年）、「田舎医者」（一八三三年）「絶対の探究」（一八三四年）「ゴリオ爺さん」（一八三五年）…）、「歩き振りの理論」は、科学とドラマの綜合の意欲に燃えたバルザックのいわば最盛期に書かれたものなのである。ピエール・バルベリスはこの生成について、「絶対の探究」を論じた箇所でこう言っている「……十八世紀は決定作用と關係を説明したのみであって、生成については理解が不充分で

あった。バルザックは『人間喜劇』総序「一八四二年」の中で「かく描かれた社会はその社会の運動の理法をたずさえていなければならなかった」と書いたが、バルザックの全作品は単なる決定論の敘事詩ではなく、運動の敘事詩であり、現実の諸矛盾から生れた運動の敘事詩である。「中略」クラス「絶対の探究」の主人公の探究と主張は、バルザック個人に相応したものであるよりは、小説という方法を用いて根本的に新しい人間主義を求めた先駆者バルザックに相応したものである。「中略」十九世紀のブルジョワ文学は、いつどこで運動の問題を實際に提出したことがあるだろうか？どうしてそのようなことができたろう？十九世紀のブルジョワ文学はすべての新しい運動の価値を否定するようにしむけられてしまったのである。」（『バルザックの世界』二五六頁―三五七頁）。なぜそうしむけられたかという点、ブルジョワ社会の固定化のためである。四八年革命以後フランス資本主義の本格化とともにフランス・ブルジョワジーは往年の革命精神を全く忘れ去った。しかし一八三〇年代は？固定化はもう始まってはいるが、騒然たる世情だった。つまり思想の固定化はまだ不十分だったのである。ブルジョワに協力するところが「進歩的」であるのかないのか全然意味をなさなくなっている。でなければどう考えたらよいのか分らなくなっている。しかしより良い社会を作ろうという使命感はすべての文学者にあった。そこにはまず文明の進歩に対する疑惑感が現れている。バルザックはどうだったのか。科学の価値を信じていたバルザックは？

ここで「歩き振りの理論」が書かれた一八三三年という年に注目してみたい。その年は大革命が起ってから四〇年余、ナポレオンが没落してから十八年、そして七月革命後三年余経っている（そして「おしゃれ生活論」発表後三年経っている）。ルイ・フィリップをフランス人の王に仕立てた七月王朝は全く上層ブルジョワジーの傀儡である。二つの党派が牛耳っていた（尤も党派といっても現今におけるような明確な団体ではないが）。運動の党と抵抗の党である。何という名前であるか！革命の名残るか？それとも科学的風潮の影響か？運動の党は八九年のブルジョワジーの原理（といっても今や民衆を切捨てたブルジョワジーだが）から七月王政を理解し、議会改革や選挙

改革の目標をかかげて若干デモクラシーの方に傾いている。七月革命の黒幕ラフィット（銀行家）は運動の党に属し、広汎なプチ・ブル層をも抱き込んでフランス産業の躍進を期したが思うようにならなかった。不況とフランス経済の立ちおくれ（英国より四〇年おくれでいたといわれる）のためである。こうして運動の党は民衆運動を自己のために利用できず、秩序と中庸（*juste-milieu*）を重んずる抵抗の党に指導権を奪われた形となる。この抵抗とはブルジョワ革命運動（今や無意味になりつつある）への抵抗の意味であるらしく、王政復古期前半に活躍したドクトリネール（純理派）が党の中心におり、憲章を不動の原理として現存の秩序維持を中庸の名において最重視する。この党には七月王政全般にわたって殆んど独裁的な権力を発揮したギゾーがいる。（詳細は田中治男著「フランス自由主義の生成と展開」東大出版会 一九七〇年を参照）

「中庸」はボワローの節度（*mesure*）ほど効果なく、むしろ史上これほど不評であつた語も稀かもしれぬ。それを信じるのは、こうもり傘を持ったスノブ、家庭の良きパパたる金利生活者（ジョゼフ・ブリュダム！）諸氏のみである。むしろこれは英国仕込みのフランス人の王ルイ・フィリップのイメージとだぶっている（ポワール！）。秩序どころか、世情は騒然とし、対立する利害関係と意欲で充滿している。不満分子はうようよし、暴動・暗殺が頻発する。リュカス・デュブルトン（「ルイ・フィリップと爆弾」（一九五一年）の冒頭でこう書いている「ルイ・フィリップの治世はわが国の歴史で最も静かな平和な世のように思われている。この治世が喚起するイメージは、高僧のように勿体ぶつた言動を弄する太鼓腹のブルジョワ、ジョゼフ・ブリュダムとそのこうもり傘、国民衛兵とけば付きの帽子である。睡気が快く襲ってくる家庭内の静謐、無味乾燥の気配ある叡智である。〃ところが現実とは全く違う。ブルジョワ王政は少くとも初期の段階では、想像もつかぬ程の極めて劇的な様相を呈する。人間、階級、観念が予想もせぬ烈しさでぶつかり合う。王の身体はたえずおびやかされ、政体は烈しくゆり動かされて安定することはほとんどない。〃それは戦闘的で攻撃的で派手な時期だ。」（七頁）

リヨンの絹織工カニユの賃上げ要求による暴動は一八三一年と一八三四年、ラマルク將軍の葬儀に端を発した共和派の暴動（サン・メリ教会事件）は一八三二年、パリ・マレ地区での共和派の叛乱（トランスノナン街事件）は一八三四年。フィエスキの大逆未遂事件は一八三五年。尚この頃コレラが猖獗、抵抗党の領袖カジミール・ペリエは一八三二年そのために死んだ。（尚、右にあげた主な暴動などに対する政府側の弾圧も烈しかったことはむろんであるが、詳説する暇は今はない）。

窓を開けば叫び声が聞えてきそうな世相の中で、そしてそういう世相を直ちに反映しなければならぬジャーナリズムの要請の下に、「歩き振りの理論」が書かれたものであることを何よりも考慮に入れなければならない。そして海の波のように響きわたるあの人間集団の叫びからバルザックが考察をめぐらすことを強いられる問題は現代の、つまり十九世紀の人間とは何かということであった。

「十九世紀の哀れな人間よ！ キュヴィエによれば種属中の最終到来者であり、ノディエによれば前進的存在（*l'être progressif*）であるという、現状における汝の確信から、汝は実際いかなる享受を引き出したというのか？ 最高の山々もかつては確実に海であったという、汝に与えられた確信から汝はいかなる享受を引き出したというのか？ また、ハーシエルの装置により太陽にその独自の熱と光る否認することによって、一切のアジアの宗教の原理をば、過去より伝わりし幸福をば破壊しさった知識、この否み難き知識から、汝はいかなる享受を引き出したというのか？ 四〇年にわたる諸革命によって流された血の海から、汝はいかなる政治的安らぎを蒸溜したというのか？ 哀れな人間よ！ 汝は侯爵夫人を失ない、ささやかな夜食の集い（*les petits soupers*）を失ない、フランス翰林院を失なってしまった。汝はもはや召使いを打つことができぬ。そして汝の得たものはコレラだった。……」（六一五頁）

ここにも科学者で出てくる。尤もノディエは文学者としての方が有名だが、このノディエは彼がごく若い頃（一



七九八年) 発表した「昆虫の触角と聴覚器官に関する研究」及び「動物書史学」の著者たるノディエである。科学的知識の発達と大革命後の社会的混乱が結局現代人に幸福をもたらしたのかどうかとバルザックは問うている。宇宙の謎にも挑む進歩するホモ・サピエンスは、自信満々である。しかしこの人間は、一八三〇年代の現時点のところで、自覚的に歴史をかえりみ、未来への展望を垣間見ようとしただろうか。ホモ・サピエンスの知は急速に拡大化し深化するとともに、白熱的観念に取りつかれて現実的感覚を失なっていないだろうか。十九世紀は十八世紀よりも文化的に進歩しているだろうか。精神の能動性ではむしろ退化の傾向を示していないだろうか。哀れな十九世紀の人間よとバルザックは自覚 (*prise de conscience*) を迫るのである。

十九世紀になってヨーロッパ文明が後退したのは、観念が人間に対して優位に置かれたからだと言田健一氏は指摘し、科学の領域では観念が事実であることが必要であるから一般に人間の世界でも観念は生きものではなくて事実であることになり、観念と事実の区別が付かなくて、それによって得る利益がこの混同を是認する方向に働いたと言っている(「ヨーロッパの人間」一五二頁)。

バルザックが十九世紀のフランス人を、『看板が大事』(*Tout pour l'enseigne*) という座右銘を持つ国民という言葉で皮肉っているのは、吉田氏の指摘と相通じている(「歩き振りの理論」六二六頁)。ブルジョワが貴族振りたいというのは十八世紀的価値の再評価がそこにあるわけではない。貴族がエレガントであるという観念があつて、それに手つとり早く従うことによってスノブというブルジョワの事実が生じている。そしてこの手つとり早く従うということの必要から「法典を作ること」が大切となる。

「法典を作ること (*codifier*)、歩き振りの指南書を作ること。他言すれば、薄弱な知能や怠惰な知能の安らぎのために一連の公理を<sup>アソシエ</sup>作成すること。この作成の目的はこれら知能に熟考する労を避けしめ、いくつかの明瞭な原理を遵守することにより、これら知能をしてその運動の規制へと導かんとするものである。この法典を学ぶ

ことによつて、進歩的な人々は、また完全性の組織を熱望する人々は、俗悪で間抜けで退屈で知ったかぶりをする卑しい人間、フィリップ王の石工とか帝政期の男爵とかに見えることはなからう。それどころか、愛想よく優雅で上品、躑けよく流行に合い、人に好かれ教養あり、公爵、侯爵、伯爵といった様子に見えることもできよう。そしてこのことたるや『看板が大事』という座右銘を持つ国民にとつて最重要のことではなからうか。

腐敗することなきジャーナリストや折衷派の哲学者や有徳の食料品屋や感じのいい教授や年老いたモスリン商人や高名な製紙業者は、ルイ・フィリップの揶揄的好意のおかげで新入りの貴族院議員となつておるが、もしも彼等の意識の奥底にまで降りて行くことが私に許されるならば、金文字で書かれた『私は貴族の様子がしたい』という願望を見出すものと私は確信している。』（六二六頁）

十九世紀の人間が社会的であるのは、文化的価値がサロンや宮廷で作られ、働く者が価値意識から疎外されていた過去の世紀とは違って、働く者（働く者と言ってもよい）が科学と産業の発展に力を得て、文化的価値を建設しつつあると信じているからである。そしてその際逆にな、今まで文化的価値を作っていると自負してきた作家芸術家たちは、「社会」から疎外されつつあると感じ、「進歩」を呪うようになる（ボードレー、フロベール等々）。こうして動く者にとつて、文明建設者ブルジョワにとつて、「デマルシュ」の法典が必要となる。分類、公理、理論、なしる能率のよい明快な箇条書きが望ましい。フィジオロジ物は、その中にブルジョワジーに対するおもしろおもしろい揶揄が含まれているにしても、それはむしろ芸術家の自負のほかない雨漏りのようなものであつて、全体としてはブルジョワ・ジャーナリズムの要請に答えている。エレガンスや優美を能率よく真似ることによつて前世紀の価値を容易に取戻せると信じる者にとつて、揶揄は批判とはならず、むしろ一層貴族ぶろうという意欲がかきたられ、スノビズムがあふられる。この現象を芸術家の側から見ればブルジョワは鈍感だということになるが、文明建設参加の勇士にはデリケートなことにかかつている暇はないのである、それどころか芸術家もブルジョワであ

ってみれば、この変容を全く意識しないかのような書きぶりや態度にも鈍感さがあることになる。

バルザックの態度はどうだったのだろうか。「歩き振りの理論」の末尾の文章で彼は次のようなことを言う。

「『人間が人生において踏み出す第一歩はまた墓へ向う第一歩である』と言った人は私から深い称賛を得るものである。そしてアンリ・モニエが描いたあの魅力的な頓間の『社会から人間を取り除けなさい、人間は孤立します』という言、この偉大なる真理を吐いたあの頓間男にも私は深い称賛を送るものである。」(六四三頁)

文中の二つの引用文の中で前者は誰の言だろうか。ピエール・コルネイユの芝居「テイトとベレニス」(一六七

○年初演)に似た文句があるが。Nous nous nous à toute heure ; et dans le plus doux sort // Chaque instant de la vie est un pas vers la mort. (acte V, scène I.) 後者の言を吐いた頓間男とは、当時のブルジョワの典型ジョゼフ・プリュドムだろう。この無智の気取り屋の役人は、しきりと愚劣な「偉大なる真理」を吐くくせがある。この引用文も当り前のことを仰々しく表現しているのみで、無意味に近い。むしろこれは孤立を恐れる満足せる「社会人」の吐く言葉だ。バルザックはおもしろおかしく両者に称賛を送っているが、単なる皮肉だろうか。進歩を否定する東洋的ニヒリズムと孤立を恐れる十九世紀的社會人の凡庸性との中間にバルザックが居ると考えたい。両者を批判することはできても、しかも批判に徹底できずむしろ両者を認めざるをえないバルザックの難しい立場を考慮に入れるべきである。

しかし実はこれは、現代文明を批判するということが大変困難な仕事だということの前触れのようなものではないだろうか。文明の享受を持ちつつ文明を批判する事は無数にあるが、これもまたジョゼフ・プリュドムの凡庸の延長線上にあるともいえる。バルザックが死んで百年程してからシモーヌ・ヴェイユが次のように書き残したとき、難しい立場は一層難しく、ほとんど苦悶というに近い「現代文明の総決算をする、またはその批判をする」ということは、いったい何をすることを意味するのか。人間を自分の手でつくり出したものの奴隷とするにいったん

を、確実な仕方で明るみに引き出そうと努力すること。方法的な思考や行動の中に、いったいどこから無自覚なものが忍びこんできたのだろうか。原始生活への逃避は、怠惰な解決法である。わたしたちが現に生きているこの文明のただ中で、精神と世界との原初的なつながりを再び発見しなければならぬ、しかしながら、人生は短かく、人々の協力を得ることも、継承者を見つけることもむづかしく、これは実現不可能な仕事である、といて、この仕事に手をつけないでよい理由にはならない。わたしたちはみな、獄中で殺されるのを待ちながら、堅琴をひく練習をしていたソクラテスとよく似た境遇におかれている……ともかくも、よく生きたといえるように」(「重力と恩寵」一九四七年、田辺保訳)しかし一八三〇年代のバルザックにとっては、文明社会の中でよく生きて行くとはどういうことなのか問題である。よく!? つまりたっぷりとかひっそりとかか? 太く短かくか、細く長くか? 分らぬ。難しい撰択だ。ここからバルバック特有の曖昧性アンビグニテが生じるのである。そのことをバルベリスは次のように分析している。

「……モンテスキューの時代にはかなり容易に理解できたものが、階級間の関係には情容赦のないものがあるという性質が明かにされた時代では、遙かに理解しがたいものになっている。そこから、精神によるある種の設計が由来する。この設計は心情の願いなものではあるが、小説家の実地調査と観察能力によって四散させられてしまう。かかる社会集団の微粒子化アトミザリオンの発見、バルザックにとってはなじみ深いこの解体ディソルションの観念、単なる事実以外に何の骨組アルゴリズムもない世界に固定的な何かを見出すことが不可能なこと、これが近代の社会的不幸感を作るある種の本質的構成物なのである。「中略」完全なものは何もない、強力なものは何もない。確信なき世紀である。なぜなら全世界ユニヴァーサルな相対性の世界だからだ。「中略」バルザックの世界が「明確に善悪が対立する」マニ教的世界でないのはこのためである。『自然』や『理性』を体现する純粹人が悪と誤謬の力と争う様はそこにはない。大革命の後「中略」勝利が得られてからの事態は政治論争ポリティックの光をまともに浴びている場合よりは遙かに明瞭ではなくなり、つい昨日まで疑

われもしなかつた諸矛盾が次第に真新しい世界を侵蝕し始めその世界にうるさくつきまとい始めるとき、事物に対する新しいヴィジョンが、ヴォルテールのコントのヴィジョンよりは必然的に劇的なそして迷夢から醒めたものとならざるをえぬヴィジョンが、是非とも必要となる。未来には、そしていづこにも、もはやザディークなど居らないらしい、そして新しい問題をやらんだ傷つける人類が、純心な人類の後を継ぐ日に、世紀病 (le mal du siècle) が生れる。「中略」「人間喜劇」の心理的・道徳的曖昧性の底辺にひろがっているのは『歴史』の持つ全世界的曖昧性なのである。『人間喜劇』の主人公たちが影であり且つ光であるのは「中略」光と闇が万人に附属するものであること、出来上った全体、解体した全体、そして作り上げるべき全体に附属するものであるということと関連している。「中略」すべての人物は地上のものであり、彼等の欲望は彼等の不安同様、フランス社会が進んで行く生長の危機を語っている。かくも多くの努力と刷新の彼方に、いづこの方向に行くやも知れぬ様々の争いのあることがはつきりと知れる。そこから『あら皮』の中でまず有名になったあの二重の運動が由来する。生の意志と自己節約である。バルザックのすべての主人公は躍動と抑制である。「中略」この世紀はブルジョワがその運命と取組んでいる世紀である。企業に乗出すために生活を動員するにはどうすべきか？しかしまた自己のもうけを活用するにはどうすべきか？時間を止めてのんびりするにはどうすべきか？これこそピロトと彼の妻の間の、またラブルダンと彼の妻の間の不滅の対話である。そのどちらもが大胆にして且つおじけづいた、創造的であるとともにマルサスのでもある世紀のスポークマンなのである。……」(『バルザックの世界』一九七三年、三三九頁—三四一頁)

価値混乱の、不断の敵対作用の、相対性の世界の中では、愚かさ<sup>アステクニスム</sup>と賢<sup>ディエクニスム</sup>さが対話し且つ同居している。現場から距離を置く賢い判断もそれに固執する限り愚かとなり得るし、不安定な現場に居て建設に参加することも滑稽で無益な浪費作用(墓への第一歩!)かもしれない。のぼせとやにさがり。精神は参加と離脱を繰返し、その輪を逃れることはできない。賢者も愚者も、否、賢者兼愚者は、行ったり来たりしなげなければならない。そしてこれこそ、

バルザックが言わんとするデマルシユの根源的な意味なのである。

そこで「歩き振りの理論」の中の次の文章、識者 (savant) と狂人 (fou) についてのパラボールが最も重要な内容を持つにいたる。

「ドアを開けたり閉めたりする行為のことを深く考え過ぎたために一人の男は気が狂った。この開閉運動はどちらの場合でも、結果においては種々違ったところはあるけれど、運動そのものでは全く同じものである。彼はこの運動をば、人間のやる様々の論争からの結論と比較しようとしたのだ。ところでこの狂人の独房の隣りにはもう一人の気違いがいて、この男は卵の方がめん鶏より先なのか、めん鶏の方が卵より先なのかを知ろうと努めていた。一方の男はドアから出発し、他の男はめん鶏から出発したわけだが、二人とも遂に神に問を質したけれど成功しなかったのである。

狂人とは深淵とちよみを見、そこへ落ちる人である。識者とは狂人が落ちるのを聞き、自分の身長を測り梯子を作って降りて行き、再び上って来て『この深淵は深さ千八百フィートあり、底の温度はこの大気の温度より二度暖かです』と全世界の人々に言うてから揉み手をする。それから彼は一家団らんの生活をする。狂人は独房の中に残っている。しかし二人とも死んでしまうのだ。狂人と識者のどちらが真実に一層近い所にいたかは神のみぞ知る。エンペドクレスはこの二つを兼ねた最初の学者オキザンである。

我々の運動のどれ一として、我々の行為のどれ一として、深淵でないものはない。そこではいかに賢明な人といえど理性を忘れることになる。我々の運動や行為はすべて、自分の身長を調べて無限を測ろうとする機会を必ずや識者に提供することになる。ところでいともつまらぬ『草』にも無限があるのだ。

ここで私はつねに、識者の測量と狂人のめまいの中間に在るのであろう。私は、私の文章を読もうとする人にあらかじめそのことを正直に知らせておかねばならぬ。これら二つの漸近線アシンクロートの中間に居続けるためには断固たる勇

が必要なのである。この『理論』は、臆することのない狂気と恐れを知らない知識 (science) の両者すれすれの所を通る程の勇氣を持った人間によってのみ書かれ得たのである。」(六一七頁—六一八頁)

狂人たちが特定の所において何をし何を考えているかはどうでもいい。識者は合理的に眞理を探究する。理性が万人に等しく配分されていると信じられていた時代では、両者の交流はなかった。識者は狂人を閉じ込めて、理性の刃で現象の誤謬を斬り伏せた。ところが、十八世紀後半から更に十九世紀へと時代が進み文明が発達してくると、事態は変わって行く。「文明は一般的に、狂気の發達に恰好の環境を作りあげる。」とミシェル・フーコーは説明する。「学問の發達は誤謬を追い払うけれども、またその結果として研究への好みとマニアをさえ生む。書齋の生活、抽象的な思弁、肉体運動を伴わぬ精神の不断の動揺、これらは最も不吉な効果を生むことがある。[中略]学問が抽象的にあるいは複雑になればなる程、学問によって挑発される狂気への危険は増大する。[中略]知識は感性のまわりに様々の抽象的関係の塀をはりめぐらせるが、それによって実社会との関係が正常に営まれる肉体的幸福を失う恐れがある。諸々の知識は確かに増大しているが、それに対する贖いも増している。……」(狂気の歴史)二二二頁—二二三頁) こうして狂気は今やひとごとではなくなってきた。狂気はこの世界で、時間と他者との関係と共に動いて行くこの社会で可能なものとなった。(デカルトは遠く去りにけり!) ふくれあがった抽象的觀念に対して直接性が復讐をする。「ヘーゲルの後では」(とこれもフーコーの言だが)あの独房の中にいる狂人とこの世界にいる狂人とが、相似性なしに並存する。二つの *alienations*—

バルザックの小説「知られざる傑作」(一八三二年)「ルイ・ランベール」(一八三二年)「絶対の探究」(一八三四年)「ガンバラ」(一八三七年)などは皆、識者(芸術家も含む)の探究マニアによる狂気への破滅をテーマにしたものである。バルザックはこれらの小説の主人公たちに冷静な批判を加えてはいるが(例えば「フレンホーフェ

ルは卓絶した画家だが……うわごとばかり言っている。まねをしてはいけぬ。仕事をするのだ。画家は手に刷毛を持っているとき以外は、考えこんだりしてはいけぬ」というポルピュスの言葉）それ以上に彼等を共感を持って描いている。そののみか彼等の中にはバルザック自身が必ずいる。ルイ・ランベールはほとんどバルザックその人である。

狂気にひかれるバルザックと狂気を恐れるバルザック。このアンピヴァレントな難しい地点に立っているバルザックこそ、真のバルザックである。そこに立っているためには「断固たる勇氣」が必要だったのである。

バルザックはこういう難しい立場を生きるのに野生的な素朴さというものを考えていたようである。ルソーの影響もある。ルソーによって自然状態の原始人は善なる人であったが、現実社会は自然状態の墮落として扱われ、新しい社会の構成（最終的自然状態の確立）に当っては墮落を前提として考えられねばならなかった。原始状態への復帰は不可能であり、新しい社会への変革が主張されたのであった。

大革命後の世紀病児の一人たるバルザックは社会に関してはルソーのように考えることはできない（例えばバルザックは、人間は生れながら善悪両方の本能を持っているという）。むしろバルザックにとっては社会の現状そのものが自然なのである。（場合によっては自然の姿が社会になる）。この自然はもはや美しくはなく、生物学的自然に近い。社会にうず巻き露呈するアンタゴニズムは、荒々しい自然の野性的エネルギーの露出を思わせる（バルザックはしばしばクーパー描くアメリカン・インディアンの原野にパリの社会をたとえる）。そこに動きまわる人間たちの情熱・嫉妬・復讐・奸計などは原始人の持つ情念そのものの再来を思わせる。ここからバルザックのホップスに近い社会観が生れるのであるが、他面彼は原始人の持つ力にそこがれていたのであった。そしてそれから、文明のもたらず「疎外」<sup>アソシエーション</sup>をまねがれんとする彼独特のモラルが生じる。



「しかし、人間は自分が思い込んでゐるよりはずっと素朴なのであって、自分の個人生活を包み隠して相手に気付かれないと悦に入っている連中は、下司な人間だ。もしもあなたが、あなたの考えを知られないようにと望むなら、子供や野生人ソウエイロビュを真似たまえ。彼等こそあなたの先生だ。

実際、自分の考えをかくすことができるためには、たった一つの考えしか持つてはいけない。複雑な人間は皆、相手に容易に見すかされる。従つて、すべての偉人たちは彼等よりも劣つた人間によつて一杯喰わされるのである。

魂アトマは、遠心力で得たものを、求心力において失なう。

ところが、野生人と子供は、彼等の生活圏の全範囲を、一つの思い、一つの欲望に集中させる。彼等の生活は独占であり、彼等の力は行動の見事な統一に存している。

社会的人間は、中心から円周のあらゆる点にたえず向つて行くことを余儀なくされる。彼は情熱や思想をたくさん持っている。自分の立っている基盤と行動の範囲との間に釣合がないので、いざ仕事となるといつも弱さがさらけ出される。」（「歩き振りの理論」六二九頁）

こうして、分析的科学に依るのではなく総合的直感に依つて運動を効果的たらしめようとするバルザックの神秘主義が出てくる。

「科学のあらゆるサインとコサインによるよりも、直感による方が、業績として得るところが多かったのであるが、私はただもうこの直感の助けを借りるほかに、証明だの世評だカウインイリトのを気にすることなどせず、私は次の如く断定した。すなわち、人間は彼の運動に由来するあらゆる行為によつて、彼の活動範囲の中で何等かの効果をあげるべき力の量を、自分自身の外側へ投げ出す（projecter）ことができるということだ。この単純な公式の中に何と明るい光が射し込むことか！

人間には自身思いも及ばぬ現象がたえずあるものだが、そういう現象の動きを操縦する力を人間は持っているのだろうか？人間は、無意識に自由にあやつることのできる、目に見えざる流動体フレイチッドを節約し蓄えることができるのだろうか？丁度それはいかのすみの如くで、いかはその煙幕の中に姿を消してしまうのである。フランスはメスメルを、勘で診る斃医者(empirique)扱いにしたが、果してメスメルは正しいか間違っているか？

かくて今や私にとって運動は、人間の最も純粹な行為である思考を包含した。更に思考を伝達する言葉を、ついで言葉を多少とも情熱的に成就するところの歩き振りと仕草を包含した。……」（「歩き振りの理論」一六二〇頁—一六二二頁）

ここで言及しておかなければならないのは、バルザックの神秘主義が近代科学を排除したところで考えられたのではないということだ。そういう排他的な発想はバルザックのものではない。彼にとつて神秘主義は勇氣を得るためのモラルと言ってよいものであって、知識の過剰と専門の細分化からくる文明の狂気化と脆弱化を救うのは全体的直感によるしかないと彼は考えているのである。

「歩き振りの理論」の中に書かれた知と狂のいわば弁証法は、つとにデンマークの学者ペン・ニクログ(Pen Nykrog)が注目し、その著「人間喜劇におけるバルザックの考えパッサ、鍵となるいくつかの概念の素描」(コペンハーゲン一九六五年)の中で取りあげた。バルベリスはニクログの炯眼に啓発されてその論を実証的に、且つ社会的歴史的に敷衍したといっても過言ではない(バルベリスの名著「バルザックと世紀病」が出たのは一九七〇年)。ペン・ニクログはこう書いた。

「バルザックには人間の条件についての二つの展望があつて、バルザックは非常に意識的にこれらの展望に均衡を保たせようと努める。作品全体、直観の総合という観点では、彼は社会学者となり心理学者となり、宇宙論者コスモロジーに

さえなる。そのとき彼が思考<sup>パッセ</sup>によって操作する生活は、一般的な法則によって管理された、大きな全体の生活であり集団の生活である。しかしバルザックは小説を作成するとき、個人主義的見地を決して捨てて捨てることはない。内部からまともに見られ内部からつぶさに経験された個人生活の諸相の綿密な研究を彼は決して捨ててはいない。

逆にまた、個人の運命を詳細に描く場合にも、全体の展望が見失なわれることは決してない。小説家の拡大鏡を通して引伸ばされた個人は、たえずまた、一般的な法則に支配され、『階層』の理法によって決定され続ける。この『階層』の中で個人は、手出しをする破目になった、或いは今後手出しをする破目に陥ることになる運命<sup>メステイト</sup>によって、条件付けられて行くようになる。個人の運命に関するこれら二つの展望の中には、あの『狂人』の視角と『識者』の視角が見出される。前者では個人は一つの中心であり一つの単子<sup>モノイド</sup>であり一つの存在<sup>エントイテ</sup>であり、具体的な何もなかである。後者によれば、個人は分子であり物であり、集会的な力に揺れ動くメカニスムである。」(二五七頁―二五八頁)

バルザックと同時代には一方ではヴォルテール風の皮肉と諷刺のある理性的教養小説「ジェローム・パテュロ」(ルイ・レーボー著一八四二年)があり、他方ではネルヴァルやノディエのような幻想的あるいは狂想的な詩的小説がある。バルザックの小説はこれら両極のどちらの範疇にも属さないが、しかもどちらに属してもよいようなものも持っている。例えば前にも少し触れたように、フレンホーフエルを批評するポルビュスには醒めた理性と確固たる良識があり、フレンホーフエルは現実を越えて夢に生きる狂的天才(または天才的狂人)である(そしてその中間で迷っている青年プーサンがいる)。また、オラース・ヒヤンシヨンは明澄な理性を一定して持ち続ける医者であり、バルタザール・クラースは絶対<sup>アブソリュート</sup>を探究する化学者だが家庭の失格者である。……ところでバルザック独自のものは、理性的にしる狂的にしる、これらの人物が個性的にしっかりと立っているということ、肖像はたんねんに描かれ光と影によって浮彫りにされて息づいているということ、更に重要なことは、社会全体の運動の一つ一つ

の波として把握されてそれらが対抗しあうものであれ妥協しあうものであれ、互いに影響しあい関連しあいつつ遂には大きな歴史の流れといっしょになるといふことである。それを別の言葉で言つと、個人の重い運命の盛衰記が一瞬渦巻きのような束になって生成する歴史運動に、我から進んでであろうが我にもあらずであろうが、参加している（あるいは巻きこまれる）ということである。この大きな運動の中では個人運動の知と狂の区別はもはやつかなくなる。

こうして「歩き振りの理論」には、バルザックのモラルにしろ文学にしろ、極めて本質的なものに触れられていることが分る。それは運動というものが、バルザックにとつてこの上なく重要なテーマであつたからである。そしてこの運動というテーマに、科学とドラマが一体化してまわりつき、バルザック独自の濃密なレアリズムを形成しているのである。バルベリスは言う。

「『歩き振りの理論』はフィジオロジヤやコード物同様、もっぱらただ識者である。生活せず、参加せず、観察し測量する識者である。理論物、法典物、生理学物以前の小説は、もっぱらただ狂人であつた。苦惱する測量せぬ狂人であつた。かくて、科学は悲劇の感覚を持たねばならない。悲劇は科学の基礎の上に立つてのみ価値がある。識者のみが、世間知らずとなり果てた『進歩』讃歌となりうるし、あるいは、無情の描写、従つて鎮痛剂的描写となりうる。狂人のみが、無責任の詩であり、嫌疑のかからぬ疎外であり、無意識である。識者と狂人、この合体こそ、意識せると同時に事件当事者たる人間性そのものである。識者であり狂人であること、これこそユートピアの終焉でありレアリスムの始まりである。しかしながら、何よりも重要なことは、小説『フェラギュス』の中に統計学的なものがある一方、『理論』の中に生活の営みの諸条件そのものに関する、心を痛める問題点と不安に駆られる——そして正確な——疑問点とが存しているということだ。識者は『フェラギュス』の中にいる。狂人は、ある

いは狂人になりかかった人間が、『歩き振りの理論』の中にいる。」（「バルザックと世紀病」第二卷一九一八頁）「……まさに運動は生命の法則である。バルザックはそれをパリで、現実の真直中で再発見したのだ。しかもその発見は二つの方法で行なわれた。そしてそれこそ「歩き振りの理論」の論点なのである。すなわち、同時代人たちの歩き振りと動きの中には背德的なゆがみがあり、毒が含まれ、戯画的なところがある、けれどもそこには、偉大な事が成されるための、そして、背徳に致りつく組織への告訴が始まろうとするときの常に必要にして強力なものである。がっしりした堂々たる断言的主張の持つ態度とともに、偽りの運動に対する告訴があるのだ。世紀は、現れた結果と今後の可能性の両面から同時に見られている。幸運の星に向って歩むラスティニャックは正当化され、一方、ゴリオは進歩の犠牲となって死んで行く。この新しい小説<sup>ヌーヴェル・ロマン</sup>を書き得たのは、狂人と識者とを合わせ持つ者なのである。科学は直接的な現実を測定し、現実の背徳作用よりも強力な一つの理想を定義する。感情や狂気は、かけがえない現実経験を測量し、完全に押しつぶされることを拒否しつつ科学と結びつく。」（前掲書一九二二頁）

大分論述を進めてきたようだが、とこれはバルザック自身の言葉を借りているのだが「我々はまだ、ドアの開閉を調べている。つまりり私の意味するところでは生か死かを調べている、独房の中の狂人と同じようなところをうろうろしている。」（「歩き振りの理論」六四三頁）人間のデマルシュの法則についての論述が、遂に決定的に明晰でありえなかったのではないかというバルザック自身の苦しい反省の聞える文章である。しかし我々は今では、単純な選択による不毛の明晰よりは、明晰であろうとの意欲を持ちつつ不安を伴う豊饒の予兆にふくらんだ不明晰がバルザックのものであることを知っている。アンピギュイテの霧から何か新しいものが見えようとする。（了）

#### 主な参考文献

(1) Œuvres complètes de Honoré de Balzac XXXIX, œuvres diverses II (1830—1835) Paris, L. Conard, 1938

- (2) Pierre Barbéris: Balzac et le mal du siècle, contribution à une physiologie du monde moderne I (1799—1829), II (1830—1833), Bibliothèque des IDÉES, Gallimard, 1970
- (3) Pierre Barbéris: Mythes balzaciens Armand Colin, 1972
- (4) Pierre Barbéris: Le Monde de Balzac, Arthaud, 1973
- (5) Pierre Barbéris: Balzac, une Mythologie réaliste, Larousse, 1971
- (6) Per Nykrog: La Pensée de Balzac dans la Comédie Humaine, Esquisse de quelques concepts-clé, Munksgaard, Copenhagen, 1965
- (7) Félix Longaud: Dictionnaire de Balzac, Larousse. 1969
- (8) J. Lucas-Dubreton: LOUIS-PHILIPPE et La Machine Infernale (1830—1835), Amiot-Dumont 1951
- (9) LA FRANCE de la BOURGEOISIE (1815—1850) (l'un des volumes de la collection Histoire de la France) Denoël, 1970
- (10) Félix Ponteil: Les classes bourgeoises et l'avènement de la démocratie, Albin Michel, 1968
- (11) Michel Foucault: FOLIE ET DÉRAISON, Histoire de la Folie, PLON [10][18] 1961
- (12) Georges Duby, Robert Mandrou: Histoire de la civilisation française Tome II, Armand Colin, 1958  
邦訳: フランス文化史Ⅱ (前川他訳) 人文書院一九七〇年
- (13) 田中治男「フランス自由主義の生成と展開——十九世紀フランス政治思想研究」東京大学出版会 一九七〇年
- (14) 石浜知行「資本主義成立史」河出書房、昭和三十年。
- (15) 水田洋・水田珠枝「社会主義思想史一五〇一六〇—一八四八」社会思想社 昭和四十六年
- (16) H・バスターフィールド、W・L・ブラック他著「近代科学の歩み」岩波新書、昭和三十五年
- (17) 吉田健一「ヨーロッパの人間」新潮社一九七四年。
- (18) Alain Robbe-Grillet: Pour un nouveau roman, Collection Idées, *nrf*, 1969.